

\*ペンテコステは主イエスのよみがえりの後50日目に聖霊が弟子たちの上にくだったことを記念する日。このことは紀元前8世紀頃に預言者ヨエルによって予言されていた。また、イエスご自身がヨハネ福音書14章16~17節で、「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」と約束されていた。

\*聖霊は、父、子、聖霊の三位一体の神。この宇宙ができる前から存在し、イエス・キリストが2000年前に降誕されたように、降臨されたのである。弟子たちに降った聖霊は、キリストを信じる者の中に宿り、常にキリストと共に歩むことが出来るようにしてくださる。

\*聖霊は「激しい風が吹いてくるような響き」や「炎のような分かれた舌」という恐ろしいしるしを伴って来られた。主イエスの上に聖霊が降ったときも「鳩のように」というしるしがあった。これらは「しるし」であって、聖霊そのものではない。

\*聖霊が降った弟子たちはどうなったか。「すると、みなか聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました。」(使徒2:4) 当時、他国で過ごしたユダヤ人たちがや旅行中の外国人、この出来事を聞いて集まってきた。「田舎者」のガリラヤ人たちが知っているはずもない自分たちのことばを語るのを聞いて驚き、怪しんだ。聖霊が降ることによってイエスの弟子たちに最初に与えられたのは外国のことばであった。それは、この後、彼らがイエス・キリストを宣べ伝えていくときにどうしても必要な武器であった。

\*弟子たちが外国語で話した内容は、「あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは。」(使徒2:11)とあるように、「神の大きなみわざ」すなわち、イエス・キリストの十字架と復活のことばであった。このことからペンテコステは宣教の原点であると言える。また、

聖霊の降臨のあとすぐに多くの者がバプテスマを受け、共に集まって礼拝と交わりをするようになったことから、教会の原点でもある。